

Title	京大広報 号外
Author(s)	
Citation	京大広報 (2004), 0404s: 1661-1670
Issue Date	2004-04
URL	http://hdl.handle.net/2433/196511
Right	
Type	Others
Textversion	publisher



京大広報

号外

2004. 4

目次

〈卒業式・学位授与式〉

卒業式における総長のことば……………1662

修士学位授与式における総長のことば……………1664

博士学位授与式における総長のことば……………1666

〈大学の動き〉

平成15年度卒業式……………1669

平成15年度修士学位授与式……………1669

博士学位授与式……………1669

〈医療技術短期大学部の動き〉

平成15年度医療技術短期大学部

卒業式・修了式……………1670



平成15年度 卒業式



京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

卒業式・学位授与式

卒業式における総長のことば

平成16年 3月24日

総長 尾 池 和 夫

今日、卒業式を迎えられた、2,913名のみなさん、ご卒業おめでとうございます。先生方に、ご家族の方々に、あるいは友人に祝福されて卒業式を迎えたことと思います。参列していただいた井村元総長、名誉教授、副学長、学部長の先生方や教職員とともに、みなさんの門出を、心からお祝いしたいと思います。

今日限り社会に出て働く方々、あるいは進学して研究者の道を目指す方たち、さまざまな進路がみなさんの前にあることでしょう。いずれにしても、4年間あるいはそれ以上の年月を過ごしたこの京都大学が、明日からは、みなさんの母校になります。今日、大学の門を出たとき、少しだけ時間を作って、みなさんが学んだ大学を振り返って見て下さい。そのときの感慨が、いつまでも記憶に残ることと思います。

卒業した後にも、多くの試練が待っていることと思いますが、そのときには大学で学習したときの先生や先輩や友人との議論を思い出してください。きっとそこからまた新しい展開が得られることと思います。そのときのためには、同窓会に参加し、母校のことを思い出し、後進を暖かく見守る卒業生であっていただきたいと思います。みなさんが母校を訪れるときのために、この京都大学のキャンパスを、しっかりと維持していきたいと思います。

いうまでもなく、大学は知を蓄積し、発展させていく場所です。みなさんはその大学で得た知を社会で活用していくことになるでしょうが、知だけではその活動がうまくできないという場面に出会うこともあるでしょう。しかし、どんな場合であっても、知だけは忘れないということが大切です。人生には、ときとして予想も出来ない事態が発生したり、社会で激変が起ったりすることもあります。そのような場面に出会ったときにも、みなさんの京都大学での学習や、課外活動の経験が、その威力を発揮することになるはずです。

卒業式にあたり、私が、みなさんに申し上げたい



ことがあります。

第1は文化を大切にするということであります。

100年ほど前、京都帝国大学の初めての卒業式は、1900年（明治33年）7月14日に行われました。土木工学の18名、機械工学の11名、計29名の卒業生に対して、文部大臣も列席しておりました。その卒業証書授与式における木下廣次総長の式辞では、「諸般の設備未だ其の半に達せず、学芸の教授に於て不便を感じしこと頗る多かりしに係わらず今日茲に第一回の卒業生を出すにいたりしものは実に教官諸君の辛苦経営創立の難業に処して殉々たる誘掖深く其のよろしきを得たるの結果に外ならず」と、労を謝しており、さらに、「本学諸般の経営は之を未来に待つべきもの多しと雖も本学が其の学生を教導するに於て要すべき主旨方針に関しては始めより一定して変することなし」と述べています。このように、大学の経営ということは、今話題になり始めたのではなく、第1回の卒業式から言われているのであります。

この4月から法律によって国立大学法人京都大学が設置され、その法人が京都大学を設置することになります。国家財政の危機に際して、大学がなんら関与しないということは、もちろんです。むしろ大学の蓄えた知を活用して、その危機を乗り越えるために貢献することが必要であります。しかしながら、十分な議論のないまま、急激な変化を強制するような改革は、大学には馴染みません。国が栄えたとき、そこには必ず優れた大学があったと言われるように、大学はその国の文化を支える聖域であります。その聖域を区別しないような改革は、文化

を支える大学をだめにしてしまう恐れがあります。

大学は文化を守る役割を持っています。ときの政治がそのことを忘れていても、京都大学は文化を守り伝える役割を果たします。そのためには経費が必要であり、人材を確保していなければなりません。みなさんには、母校を精神的にも、また財政的にも支援する社会人に育ってほしいと願っています。

第2は、人に優しい人であるということです。

人の話を聞くということが大切です。今日ご列席の副学長である、東山先生の著書に、「われわれはしゃべりすぎたという反省はよくしますが、聞きすぎたという反省はほとんどしません。」という文が出てきます。これは、情報の発信者と受信者を比べたとき、情報を発信した方が情報をコントロールしているように、見えるかもしれませんが、実は受信する方こそ、情報を本当にコントロールしているのだという原理から来る文であります。人の話をよく聞いて、自分で判断して人に接することが大切です。このことは人に優しいという、他人を思いやることに通じると思います。

今、日本の社会では、リストラとか、削減とか、効率化というような用語が盛んに聞こえます。いずれも経営者の論理に用いられる用語です。それが日本の国の未来に役に立つように錯覚してしまうほど、マスメディアでも盛んにこれらの用語が登場します。しかし、統計が示すように、先進国の中で、日本は公務員の少ない国であり、国民総生産に比べて教育費の支出が目立って少ない国であります。世界で最も早い時期に人口減少に向かう国と言われる日本では、新しい雇用の創出というような、労働者あるいは市民の側の論理で語られる改革が、今もっとも重要であると思います。京都大学を卒業するみなさんも、どんな場所で、どんな仕事をする場合にも、どうか、必ず市民の側に立って物事を考え、市民の側に立った仕事をする人であってほしいと思います。

人を大切にすることとは、平和を愛することにもつながり、また差別のない社会を作り上げるという考えにもつながります。

京都大学に、民受連と呼ばれる団体があります。その民受連を中心とする運動によって、日本にある在日外国人の卒業生に大学入学資格が認められまし

た。この運動は、井村元総長と学生の話し合いがきっかけとなったものであります。そして長尾前総長のときに、同和人権問題委員会の山崎委員長がとりまとめた報告がもとになって、ようやく広く受験資格が認められることになり、その制度のもとで、合格者を出すことができました。

ちなみに京都大学では、1946年（昭和21年）5月15日の入学宣誓式における鳥養利三郎総長が、その式辞で、「本年初めて女子学徒を加えたのでありますが、私は女学生諸子の学力、人格に信頼し、何等差別的取扱、特別待遇を考慮しない考えであります。」と述べています。

第3は、法を守るということです。

この言葉には二つの意味があります。一つは、法を破らない、法律を最低限の規範として暮らすということですが、もう一つの意味は、優れた法が悪い法へ書き換えられないように、法そのものを守ることでもあります。

法律にはその国の、ときには大きな犠牲の積み重ねによって生まれた歴史があります。戦争の反省から生まれた日本国憲法や、その延長にある教育基本法のように、失われた内外の尊い市民の命と引き替えに生まれた法があります。その精神を護る人であってほしいと思います。

国際化という言葉がたびたび聞かれます。真の国際化は、異文化の交流によって相互に理解を深め、忍耐強く会話を続けていくことによって、時間をかけて得られるものであります。言葉の上では国際化と言いながら、現実の世界では、強大な力を持つ特定の国の論理で戦争が行われ、それに協力していくことが国際協力というように呼ばれる場合があります。地球上のどこかで常に殺戮が行われ、幼い命が失われている現実があります。京都大学で学んだみなさんが、真の国際化を志し、いつまでも真の平和を愛する人であってほしいと、私は切に願うものであります。

また、教育基本法の第10条は、「教育は、不当な支配に服することなく、国民全体に対し直接に責任を負って行われるべきものである。教育行政は、この自覚のもとに、教育の目的を遂行するに必要な諸条

件の整備確立を目標として行われなければならない。」とあります。この精神は、大学の自治を保証するものであり、ときの政権から教育の独立を保証するものです。このような歴史の重みを持つ法を改変しようとする動きには、注意深く目を開いていなければならないと思います。

その他にも、社会に出るみなさんに申し上げたいことは、いろいろありますが、要は、平和を大切に、地球を大事にし、人を大切にすることです。法を守り、社会に貢献し、人類の福祉に貢献する人であってほしいということです。また、科学に興味を失わず、学問への志を持ち続け、

自らの体と脳と心の健康に気を配りながら、これからの人生を大切に生きていってほしいと願っています。

芸術に、文学に、人文科学に、社会科学に、自然科学に、人類の文化や文明のあらゆる分野の歴史に、これから新しい内容を加えていくのは、今日ここで京都大学の卒業式を迎えられたみなさんであります。みなさんが、そこに目を見張るようなすばらしい内容の歴史をたっぷりと書き加えてくださることを願って、私の式辞といたします。

ご卒業、おめでとうございます。

修士学位授与式における 総長のことば

平成16年 3月23日

総長 尾 池 和 夫

今日、京都大学修士の学位を得られた、2,032名のみなさん、おめでとうございます。ご列席下さった名誉教授、副学長、教職員とともに、修士学位を受けられたことをお慶び申し上げます。

修士の称号を得たみなさんは、この2年間の過程で、貴重なさまざまな経験を積まれたことと思います。研究の世界の姿をしっかりと自分の手足を動かしながら体験し、自分で物事を考え、自分で設定した目標に向かって仕事をするという貴重な経験をされました。その結果、設定したテーマで論文を書き、試問を受けて学位を授与されたのであります。自らの力で得た学位であるという認識を持つことが出来て、これからの人生を進んでいくための第一歩を無事に踏み出したという実感を味わっていることでしょう。

現在の学位制度は1991年に決まったものです。それ以前は、学位は、医学修士とか、文学博士というような分野ごとの称号でしたが、現在は修士（経済学）というような称号になっています。

もともと今の学位制度の起源は、中世ヨーロッパの大学にあります。日本の博士という呼び名の起源は、唐の制度にならった古代大学寮の博士（はかせ）制度にありました。学位制度には、ヨーロッパ系と中国系との二つがあるわけです。ヨーロッパ中世の大学では、ドクター、マスター、バachelorの三つがありました。このうち、ドクターは大学の教師資格を証明する称号、マスターは親方あるいは主人という語から転じて、校長や教師という意味の称号でした。みなさんの学位である修士という称号は、第2次世界大戦後の1949年に、新制大学院制度が導入され、大学院課程の初めの2年の履修を証明する学位として、アメリカの学位に、形の上でなられて、新しくマスターの学位が導入され、その訳語が修士と決まったものであります。

京都大学の中でも、分野によって修士課程にはいろいろな考え方があります。学部の課程では卒業後の仕事に必要な知識が不足するために、その延長として修士課程を位置づける考え方もあり、博士後期課程で研究者として高度の研究テーマに挑戦するために必要な前段階を、修士課程で実施していて、それだけでは完成した研究ではなく、完成度の高い論文を書くことを、修士では特に求めないという分野もあります。また、修士論文が、国際的な学会誌に掲載される完成度の高い論文である実例もたくさん

見られます。

いずれにしても、京都大学修士としての資格を持つための課程を修了されたのであり、みなさんの得た修士学位は、これからそれぞれの道を歩いていくために大切な、免許証となるものでありましょう。

京都大学で、今回初めて修士の学位を授与することになった分野は、地球環境学舎の分野です。2002年、平成14年4月19日金曜日に設置された地球環境学舎の入学式では、私が式辞を述べました。そのとき私は、「本日、長尾 真京都大学総長は、国立大学協会の会長として、臨時総会を開催します。国立大学法人化の方向がそこで決まる可能性があります。皆さんは、この大学院が、国立大学として存在する間に学ぶ、歴史的に見て貴重な体験をすることになるかもしれません。」と申し上げました。

そのときからほぼ2年が経過し、今日、この席にそのとき入学された方たちがおられます。その意味でもまた、私にとって感慨深いものがあります。

京都大学の基本理念にあるように「多元的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献する」ことが、21世紀の人類のテーマでもあります。また、京都大学環境憲章でも「環境問題が地域社会にとって重要な課題となりつつあることは周知のところであり、京都大学としても教育・研究機関の使命として、教育や研究を通じ、環境問題解決に向けて積極的な取り組みを行う所存であります」と述べています。このように、環境は地球環境学舎のみのテーマではなく、全学を通じての共通の課題でもあると言えます。

2年前、私は次のように申し上げました。

「何はともあれ、まず地球のことを詳しく知ってほしいと思います。電磁気圏も大気圏も、水圏も生物圏も岩石圏も、そしてそこに住む人間も、詳しく知ることが、皆さんの学習や研究の基本になることと思います。」

京都大学のキャンパスのあるこの京都盆地は、活断層運動によってできた盆地であり、地下水を豊富に蓄えるその盆地が、京都の文化を育て、京都での産業を興してきました。また、つぎのようにも話しました。

「人類は、地球に誕生して最初の長い間、森や土石

や、水や、太陽の光の中で暮らしてきました。これらの地球上の状態は、地球と太陽のエネルギーによって長期間につくり出されたものであります。人はやがて、森を切り開き、地面を掘り、水の流れを変え、今では惑星間空間へも出かけ、人工物体を送り出すようになり、太陽エネルギーを直接取り込む宇宙ステーションの建設も、京都大学の研究テーマの一つになっています。」

そして、今年、4月1日には、太陽エネルギーの利用から、木材の利用による炭酸ガスの固定まで、幅広く研究する生存圏研究所を発足させることになりました。

2年前、修士課程に入ったとき、すでに研究テーマを設定して入学された方も、入学してからしばらくは学習に専念して課題を見つけた方も、また、指導教官から与えられた課題で研究を始めた方も、さまざまなやり方で研究を進めて来た方々が、それぞれのプロセスを今思い出しておられると思います。

地球環境学舎の地球環境学専攻では、「地球環境・地域環境問題に対応し、異なった基礎学問との連携を保つことのできる新しい視点と方法論をもって、国際的に活躍できる研究者を養成する」とされ、また、環境マネジメント専攻では、「地球環境問題を解決するために、実践的・国際的活動を行うことのできる高度な知識と問題解決能力をもった専門家を養成する」とされています。

こうして本日、京都大学で初めて、地球環境学の分野で、31名の方々に修士学位が授与されたわけがあります。

その修士論文の中で、私は特に特定の地域とその地域独特の課題を取り上げたいくつかの論文に関心を持ちました。

環境マネジメント専攻の穴田夏野さんは、「タンザニアの山村地域における飲料水の利用の実態」を研究し、「モロゴロ県キボグワ村の持続可能な発展を目指して」という副題を付けた論文をまとめられました。この村は、急斜面につくられた野菜畑で知られており、在来の農業が備えているような環境を保全する仕組みの欠如した急速な近代化で、急斜面からの土壌の流失が著しいという問題を持つ村です。雲を見下ろすように高い尾根に集落ができています。

うな山村での飲料水が研究の課題です。

一方、小川菜穂子さんは、京都府宮津市の上世屋地区を例として、ササ葺き集落の景観の変遷とその継承に関する研究の成果をまとめられました。上世屋の棚田は、日本海を望み、集落と相まって美しい山村の風景を見せてくれるので知られています。標高の高い棚田の朝は、特にすばらしい景観を見せていると言われています。京都府北部の山間部では「チマキザサ」を用いたササ葺きが、一般的に行われていたそうです。ササ葺きには独特の趣があり、葺きたての屋根は青々としていて、「キャベツの切り口」のようだといわれるそうです。

その他にも、京都大学の桂キャンパスの弁当提供システム、三木総合防災公園の生態系、ベトナムの少数民族集落におけるエコロジカルサニテーション事業、新疆ウイグル自治区北部での防風防砂林帯の造成など、特定の地域に根ざした、多くの具体的な研究の成果がまとめられています。

これらの研究成果をもとに、さらにそれに続く研究が行われ、地域の課題を解決する方向が見いだされたとき、きっと大学院修士課程における学習と研究の成果が実ったという、一段と大きな感激を味わ

うことになるであろうと思います。

これからの人生で、場合によっては、設定した目標に向かって進む途中に、挫折しそうになることもあるでしょう。失敗を経験した人ほど強い人になるという先輩たちの貴重な経験もあります。みなさんが失敗をおそれずに、信じる目標に向かって、思い切って仕事を進めるという人であってほしいと思います。

今日は、初めて修士の学位を授与された地球環境学舎の分野に焦点を当ててみましたが、京都大学では、16の分野の修士学位が授与されるものであり、これらのさまざまな分野の学位を得られた方々が、明日から、さらに高度な学問を修める道を選び、あるいは行政や企業の現場に立ち、教育の現場に立ち、またN G Oで国際的に活動するなど、その活躍の場所は世界のあらゆる所に用意されています。

本日、京都大学修士の学位を取得されたみなさんが、それぞれの目的に合致した最適の場所を見つけて、思い切り学習や研究の成果を生かして活躍してくださいることを期待して、私の式辞といたします。

おめでとうございます。

博士学位授与式における 総長のことば

平成16年 3月23日

総長 尾 池 和 夫

今日、新たに、580名の京都大学博士が誕生しました。学位を得られた方々、まことにおめでとうございます。ご列席の、副学長、各研究科長とともに、課程博士489名、論文博士91名のみなさんに、また、参列されたご家族に、お慶び申し上げます。

みなさんの学位論文が、それぞれに社会に貢献して、関連の分野の研究成果の蓄積となり、学問の進展に繋がって行くことでしょう。京都大学には、設立以来、100年を超える大学の歴史の中で、基礎研究の成果が蓄積されています。同時にその蓄積をもとにして、あらたな研究とそれを進めるための人材



の養成が行われています。

20世紀までの科学や技術の急激な発達に基づく物

質文明の進化が、豊かな社会を築くと同時に、人類の歴史に不幸な一面も書き加えてきました。今、私たちは、蓄積した合成物質をいかに資源に戻して再利用するかを考え、壊れた川の環境を自然に戻す方法を考え、木材を永く活かすための町のデザインを考えています。

今、例えば、生命科学が急速な発展を見せていますが、その発展の向こうに、漠然とした不安を抱えている人も多いと思います。人類の福祉に貢献する方向へ、生命科学を中心とした新しい知の蓄積を生み出すのも、この京都大学の大きな使命であると思っています。

本日、博士学位を授与された中で、生命科学の分野と、社会健康医学の分野の博士学位は、京都大学として初めて授与したものであります。

京都大学生命科学研究科が設立されたのは、1999年4月でした。研究科長の稲葉カヨ先生は、生命科学研究所の設立と歩みを解説した中で、「21世紀に入り生命現象を遺伝子・分子・細胞のレベルに加え個体のレベルにおいても実証する生命科学が新しい段階へと進みつつあります。京都大学ではこのような流れを見越して1999年に理学、農学、薬学、医学の研究グループを結集して内外の大きな期待の中で我が国において初めての生命科学研究所が発足しました。」と述べておられます。

その設立にいささかの関与をした私も、今年の学位論文に関心を持っており、いくつかの審査報告を拝見しました。先端の研究は細分化していて、専門の異なる分野の博士論文は、なかなか理解できないものですが、それでもつい引き込まれて読むものが、必ずあります。その例を紹介します。

小川 聡さんの論文題目は「線虫の微小管構築の制御に必要な遺伝子の解析」という論文で、主査は西田栄介教授です。細胞骨格は、細胞の運動や細胞の形成あるいは保持に関わっています。レーザー顕微鏡の像で見ると、核から放射状にのびる繊維が見られ、一つの細胞が小さな宇宙のように見えます。

微小管は、あらゆる生物に普遍的に存在し、生命現象の制御を担うものです。この論文は、線虫の微小管制御に関わると考えられる遺伝子ファミリーの

解析を行ったものです。微小管の性質や構造は、初期発生の過程において劇的に変化し、また、正確に制御されているそうですが、その制御機構は十分に解明されてはいないのです。遺伝子ファミリーが、普遍的に、微小管制御に関与することを示す成果は、きわめて興味深いものであり、細胞生物学、発生生物学など、広い分野への貢献が期待されるものであります。

馬場真里さんの論文は「共生窒素固定根粒の老化に関する研究－インゲン根粒菌により形成されたミヤコグサ早期老化根粒をモデルとして－」というもので、主査は泉井 桂（いずいかつら）教授です。

マメ科植物は、根粒と呼ばれる特殊な器官に根粒菌を棲まわせ、共生的に窒素固定を行わせる能力を持っています。さらに、通常では、お互いに厳密に定まった相手とのみ共生が成立することが知られています。人類が膨大な化石エネルギーを使って化学合成した窒素肥料を農地に投入しているのに対して、このマメ科植物と根粒菌との共生窒素固定は、クリーンな太陽エネルギーに基づいているという点でも、この研究は非常に重要です。この論文は、インゲン根粒菌によってミヤコグサが根粒を形成するかどうかという初歩的な実験を手始めに、根粒老化に関する独自の研究を展開してまとめられました。マメ科植物の根粒老化に関する分子的な解析例は極めて乏しく、この研究の成果は大変重要です。

京都大学情報学研究科は、生命科学より1年早く、1998年4月に設置され、今日を含めて、すでに175人に博士学位を授与しました。21世紀の高度情報化社会の学術基盤を形成し、人材を養成する使命を担って設置されました。情報という概念は、物質文明の極度に発達した社会で生まれたものであり、コンピュータとネットワークの発達に支えられたものです。人類の知的活動を支える重要な道具として、情報技術が、これからの世界で活用されていかなければなりません。

情報学の分野の学位論文の中に、故上林彌彦教授が主査を務められた二つの論文があります。

その一人、ソムチャイ・チャットウィチェンチャイさんの論文は「XML文書のアクセス制御ポリシーの変換に関する研究」という題目です。XML

は人間にも分かりやすくコンピュータも扱える文書表現として広く使われています。この論文は、異なる書式のXML文書を利用している組織間の情報交換で生じる問題を解決するために有効なアルゴリズムを提案した点で、学術的価値の高いものであると評価されました。提案されたアルゴリズムは、電子商取引、電子政府、医療分野など、社会情報流通基盤整備にとって不可欠なもので、学術的にも実用性の上でも有意義なものです。

もう一人の井出 明さんの論文題目は、「高度情報化社会における適正な情報の流通について」であります。高度情報化社会の諸問題を、情報流通の法的な側面という観点から考察した論文であり、最近の高度情報化社会の様相の変化を記述するとともに、流通している情報の内容的な適切性と、流通の制御システムの妥当性を考え、情報を受容する権利を、「知る権利」を中心とした人権としてとらえています。すべての情報の価値は同じではないということを、数理モデルによる解析で示し、ある特定のサイトに、突然人気が集まる様子が、マスター方程式を用いたコンピューターシミュレーションによって解析されています。情報学と法学という二つの領域に橋渡しをする境界領域で、独創性の高い研究の成果です。

同じ情報学の分野で、木村玲欧さんの論文、「都市地震災害を事例とした災害過程における被災者行動の解明と被害想定手法の開発」というタイトルにも、私は大変興味を持ちました。主査は、林 春男教授です。従来の防災研究では、外力の理解と被害抑止策に焦点が向いていますが、この研究の成果は、地方自治体の事前対策における避難者数推定や避難所運営計画の検討などに応用できるものであり、行政の災害対応能力の向上につながるものです。

また、本日の午前に行われた修士学位授与式では、今年初めて地球環境学舎の修士学位が授与されましたが、地球環境の課題は、この地球環境学舎だけの課題ではなく、全学的な課題であるといえます。

博士（農学）の学位を得た、コンキヤット・キチワタナウォンさんの論文は「タイ国アオウミガメの生態と保護に関する研究」で、主査は田中 克教授です。ウミガメ類は現在生息頭数が減少し、すべて

の種について絶滅が危惧されており、その生態の解明が急がれています。この論文は、東南アジア海域を回遊するアオウミガメの回遊経路と海草群落との関係を解明しました。ウミガメ類はすべて広範囲に回遊するため、多くの国による総合的な保護対策が重要であることを指摘し、研究結果をもとに、回遊経路に沿った国々での共同研究による保護対策を具体的に提案しました。

今、世界は、物質とエネルギーを消費する時代から、生命や情報や環境を考える時代へと変化しています。人口問題とともに食料や水の不足が予測されています。人口の減少を他国に先駆けて経験しようとしている日本で、世界をリードする研究を目指して、博士学位を授与されたみなさんが、さまざまな分野で、情報を正しく活用し、質の高い情報を生産する研究者として活躍されることでしょう。

みなさんはこれから京都大学博士と呼ばれます。この学位はきわめてレベルの高い学位であります。これまで、学位を取得するため、ともすれば専門の分野の中で深く究めることに、みなさんは主眼を置いてきたかもしれません。これからは広い視野を持つことを同時に心がけて研究を続けてください。

人文科学や社会科学の分野からは、自然科学や技術の分野の急激な進展にいつも関心を持ち、自然科学からは社会の動きにも敏感に目を向けるということが必要です。京都大学の自由な学風は、そのようなことのためにも有利であると思いますが、その京都大学の長所にも、また短所にも、もう一度目を向けて、後進のためにご意見を下さるようお願いします。

21世紀を希望あふれる創造の時代として、人と地球が共存できるように、豊かで持続可能な社会の維持に向かって、みなさんが活躍されることを祈ります。本日、博士学位を得たみなさんが、明日からまた新たな挑戦を始められることを期待して、私の式辞といたします。

博士学位、まことにおめでとうございます。

大学の動き

平成15年度卒業式

3月24日（水）午前10時から、総合体育館において名誉教授をはじめ両副学長、各部局長等の出席のもとに平成15年度卒業式が挙行された。式は京都大学交響楽団による式典曲「輝を垂れて千春を映さんとす」の奏楽で始まり、学歌斉唱の後、尾池和夫総長より各学部代表に学位記が授与された。

続いて総長の式辞があり、最後に全員で「蛍の光」を合唱して、午前10時50分に終了した。

本年度の新学士は、総合人間学部134人、文学部202人、教育学部76人、法学部524人、経済学部255

人、理学部308人、医学部93人、薬学部80人、工学部940人、農学部301人の計2,913人であった。



平成15年度修士学位授与式

3月23日（火）午前10時から、総合体育館において名誉教授をはじめ両副学長、各研究科長等の出席



のもとに平成15年度修士学位授与式が挙行された。

尾池和夫総長より各研究科代表に学位記が授与された後、続いて総長の式辞があり、午前10時40分に終了した。

本年度の修士課程修了者の分野別内訳は、文学92人、教育学43人、法学57人、経済学63人、理学235人、医科学13人、社会健康医学29人、薬学76人、工学597人、農学264人、人間・環境学153人、エネルギー科学120人、地域研究7人、情報学182人、生命科学70人、地球環境学31人の計2,032人であった。

博士学位授与式

3月23日（火）午後1時から、総合体育館において尾池和夫総長、両副学長、各研究科長等関係者の出席のもとに博士学位授与式が挙行された。

尾池和夫総長より580名の博士学位授与者一人一人に学位記が授与された後、続いて総長の式辞があり、午後2時50分に終了した。

博士学位授与者の分野別内訳は、次表のとおりである。



平成16年 3月23日付 博士学位授与者数一覧

学 位 名	課程博士	論文博士	合 計
博士（文学）	15 人	4 人	19 人
博士（教育学）	0	1	1
博士（法学）	5	4	9
博士（経済学）	13	3	16
博士（理学）	98	11	109
博士（医学）	105	20	125
博士（社会健康医学）	1	0	1
博士（薬学）	19	7	26
博士（工学）	69	23	92
博士（農学）	52	11	63
博士（人間・環境学）	40	0	40
博士（エネルギー科学）	18	3	21
博士（地域研究）	9	0	9
博士（情報学）	28	4	32
博士（生命科学）	17	0	17
計	489	91	580

医療技術短期大学部の動き

平成15年度医療技術短期大学部卒業式・修了式

医療技術短期大学部では、3月17日（水）午前10時から、本短期大学部講堂において来賓の出席のもとに、卒業式・修了式が挙行された。

式は卒業証書・修了証書授与に引き続き、学長式辞、来賓祝辞があり、午前10時50分に終了した。

卒業生は、看護学科74人、衛生技術学科43人、理学療法学科18人、作業療法学科16人で、修了生は、専攻科助産学特別専攻20人の計171人であった。

